

時代変遷に伴う沿岸要塞の景観的特質の変化に関する研究

熊本大学 工学部 学生員 ○吉富 佳重 熊本大学 工学部 正 員 小林 一郎
 熊本大学 工学部 正 員 星野 裕司 熊本大学 大学院 学生員 萩原 健志

1.はじめに

既存の景観研究では、主対象の見え方に重点を置いた考察が行われている。しかし対象の眺め方だけでなく、実際に行われる事象を含めた空間の眺め方として景観を考えることも重要なのではないかと思われる。また、眺望景観を分析する際に、工学的技術などが私たちの景観体験に影響を与えるため、技術的な側面を考慮することも必要である。事象的な空間の眺め方を考察するにあたって、実用的な景観は比較的明確な知見を得られるのではないか、さらに、その知見は名所などの遊興的な場合においても有効な視点を提示できるのではないかと考えられる。

以上の背景より、今回の一連の研究では、景観を行為の場として捉えており技術の進歩が顕著に表れる軍事行為を対象とした。既存研究では明治時代を対象とし、沿岸要塞から得られる眺望景観をパターン化して分析が行われた。本研究では時代変遷を考慮するために、鎖国末期で沿岸地域を脅かす外国船が頻繁に來航した幕末期から日清・日露戦争が終結し要塞整理が行われ始めた大正・昭和初期を対象とし、この期間に共通して現れる下関要塞について具体的な考察を行った。

2.軍事技術の変遷

1) 要塞

・) 大砲

幕末期に使用されていた主なものとして、18 斤長カノン砲、100 斤臼砲、150 斤臼砲があげられる。この射程距離については 5000m 程度である。明治期は 28cm 榴弾砲や 24cm 臼砲が用いられ、射程距離は 5500 m～8000m 程度である。大正・昭和初期に入ると 45 口径 15cm カノン砲、11 年式 7cm カノン砲が設置され射程距離は 14000m～18000m となった。

・) 観測所、観測具

明治初期までは観測器具で敵艦の位置を確認し、号令や伝声管、電話などを用いて砲側に伝えていたため観測所や電灯は砲台に近接して造られていた。しかし大正・昭和初期になると視認性よりも航空機からの秘匿性に重点が置かれていたため数百～数千 m 砲台から隔離する傾向にある。昭和以降ではさらに観測機器の発達で敵艦の距離、方向、航路未来位置を電氣的に決定できるようになり観測所は砲台から数 km 隔離して造られた。

2) 艦船

日清戦争に至るまでの日本の主な戦艦には 1878 (M. 11) 年の扶桑 (排水量 3700t) があり、当時の速力は戦艦で 14kt、巡洋艦で 16kt であった。日露戦争時には戦艦のほとんどが 10000t を超す大型艦となり、速度も 18kt 程に上がった。日露戦争後には戦艦ドレッドノートや巡洋艦インビジブルという今までの軍艦を凌駕する軍艦 (17900t、20kt 以上) が建造され、これらの軍艦の出現を境に以後大型艦船がますます発達した。

3.時代による砲台位置の変化

1) 幕末期から昭和初期にかけて下関要塞における砲台の位置関係を整理した。(図-1)

幕末期 (長州藩側) …茶臼山、杉谷、壇ノ浦、亀山、弟子待

明治期…火の山、門司、古城山、老の山、田の首崎、筋山、田向山、笹尾山

大正・昭和初期…角島、観音崎、蓋井島、白島、六連島老の山、田の首崎、八幡岬、大島

2) 下関要塞の役割

幕末期…眼前の敵艦が上陸するのを阻止すること。

明治期…下関海峡を敵艦が通過することを防ぐことが主な目的である。その他には敵艦の上陸の可能性がある港湾の防御などがある。

大正・昭和初期…敵艦から自国船の朝・満航路を確保することと八幡製鉄所掩護のための東北玄海灘・日本海付近の防備の充実化が主な目的である。

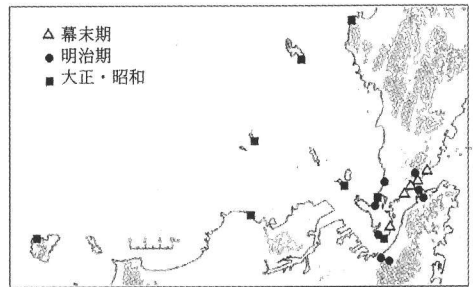


図-1 時代別砲台位置(下関)

4.眺望景観の時代別比較

全時代について砲台毎にその位置、標高、大砲の首線方向を考慮してそこから得られた眺望景観をカシミール

(3DCG ソフト)を用いて作成した。幕末、明治、大正・昭和を比較すると特徴としてバリエーションの相違が見られた。幕末期については眼前があまり開けておらず奥行きを感じられない近景的な眺望が多く見られた。明治期では数の偏りはあるが3つのパターンに分けることができた。1つめは幕末期で見られたような近景的な眺望であり、2つめは奥行きを感じられ敵艦が前方から手前に向かって進み眼前を通り過ぎる動きが予想できるような俯瞰的な眺望である。3つめは上記の2つのパターンと比べて、攻撃の対象となり得る敵艦が遠くを往来するような遠景的な眺望である。大正・昭和初期に関しては、遠景的な眺望の占める割合がほとんどであった。しかし明治期の遠景的な見え方と比べると、砲台が標高の高いところに位置するため、より開けた展望になっているのが特徴としてあげられる。以上のことを整理したものが図-2となる。

5.おわりに

砲台の配置においては、幕末期の下関海峡内部から、明治期の海峡進入部へ、大正・昭和期の玄海灘方面への移行を確認することができる。これは2章で述べた大砲などにおける技術の進歩や要塞自体の役割の変遷により変化してきていると考えられる。一方、眺望景観においては図-2に示すように、幕末期は近景的な眺望1種類であり、明治期は、奥行きを感じる俯瞰的なものを中心にして、近景的・遠景的な眺望のバリエーションが存在し、大正・昭和期においては、茫漠とした遠景的な眺望1種類というように変化している。幕末期と明治期には近景的な眺望が、明治期と大正・昭和期には遠景的な眺望が同様に存在するが、それぞれにおいても、時代が進むにつれて視野が広がる傾向がある。これらは、砲台の配置と同様、技術の進歩等が大きく影響しているのではないかと考えられる。

幕末期	明治期	大正・昭和初期	
			近景的
			俯瞰的
			遠景的

図-2 眺望景観のパターン

〈参考文献〉

- 1)星野裕司：時代変遷における軍事要塞からの景観的特質について：土木計画研究 講演集 23(2)、2000.11 p291~294
- 2)浄法寺朝見：日本築城史：原書房、
- 3)原 剛：幕末海防史の研究：名著出版
- 4)佐山二郎：大砲入門：光人社、
- 5)竹内昭・佐山二郎：日本の大砲：協同社